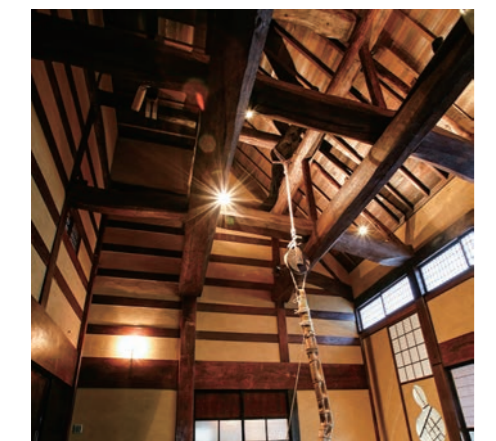




シリーズ【オーナーズボイス】第17回 - 茂原市・S様 前 人が集まって、笑い声が聞こえる家。夢の途中です。



2005年に保川建設の会長、社長といっしょに移築再生する古民家を探しに新潟の妙高へ赴きました。実は、私は特に移築という強い希望があったわけではないのですが、会長に勧められ、見るぐらいならという気持ちで新潟を訪れたんです。そして、妙高周辺の3、4軒を回って歩き、これだ！という軒に巡り会ってしまったんです。それがこの家だったのです。会長はこの家を見た瞬間、「あっ、これは全部使えるな」と言われたんです。さらにこの家の化粧貫を見て、「これだ」と確信されたみたいです。私も、この化粧貫を見て、会長と同様に「これだ！」



と確信しました。普通、化粧貫というのは柱と柱の間の壁に数本入っているものですが、この家はそれが細かく、5本も入っていました。その化粧貫の美しさに気が入り、さらに会長の一言にも押され、この家の移築再生を決断したわけです。

古民家3つのデメリット、素晴らしい解決策があったんです。

私は古い田舎家(古民家)に暗い、寒い、使い勝手が悪い、というイメージを持っていました。それでいざ再生するっていう時に、この三つのマイナス面にどのように対処するかって頭を悩ませ、保川さんに相談しました。例えば「寒い」については大部屋だけではなく小さな部屋をつくる。ダイニングキッチンや日当たりの良い場所にする。「暗い」は明り取りの小窓をあちこちにつける。普段家族のいる部屋は南にもってくる。そして、段差をなくして「使い勝手」を良くする等々です。こうすれば古民家も住みやすくなるんじゃないだろうか。まさに大正解でしたね。



家を建てるというのは家の歴史を紡ぐということ。

建てて間もなく、ある人にこんな事を言われました。「昔は家を建てるのに1、2年くらいかかったのですが、でも、この家はひよっとすると材料集めにさらに溯ること1代、2代とかかっているかもしれない。材料ってすぐには使えないでしょ。そうすると建てる時の時間よりも材料集めの時間の方が長かったりするんじゃないかって。これは教わりましたね。木材は乾燥させなければすぐには使えず、一度に全ての材料が集まったとは思えないので、長い年月をかけて保存されていた材料もあったらいいなと夢見ているところなんです。」と。古民家って材料を用意した人はすでになくなったとしても、その方の思いはしっかり受け継がれていくものだ、今強く思いますね。



家を人と人をつなぐ拠点にする。夢は始まったばかりかな。

設計コンセプトですが、「人が集まって、笑い声が聞こえる家」というふうにも考えました。そこで私、この家を「兪(せん)の館 傳八どん」と名付けたんです。「傳八どん」は屋号ですが、「兪」っていうのは人が集まるっていう意味なんです。この家の新築祝いに、早速知人がその名の入った看板を造ってくれました。今、家の中にで〜んと掛かっています。



古民家再生してあつという間に10年が経ってしまいましたが、その間、いろいろな方と出会うことができました。アメリカの留学生やダンスチームのメンバーのホストファミリーをするという機会も得ました。何事も、始まりは人と人との出会い



次号へ



きっと、もっと、おもしろくなる。

2018年、今年の暮らしは、

その全てが明日につながっています。

いろいろな人に出会いました。

2017年もたくさんの仕事、

保川久夫フォトギャラリー

「耐える。」



雪国の冬は生物にはいちばん厳しい季節です。動物も植物も、人間以外は冬が通り過ぎるのをじっと耐えて待つしかないのかもしれませんが。晴れた日は深閑と静まりかえり、いっほう、吹雪の日には全てが飲み込まれてしまうような冬の嵐に翻弄されるのです。そんな北の大地で生き物たちは、寒さに耐え、空腹に耐え、嵐をこらえて、じっと春を待っているのでしょうか。ここではこの木は忍耐のシンボル、そんな気がしたものです。(保川久夫)